

読者と共に考え、共に解決策を見出す総合ビジネス誌

財界

ZAIKAI
a Japanese business biweekly

磯崎功典・社長
就任5年目の試練

英ファンドから売却要求が出る
キリンホールディングスの
医薬・健康事業へのこだわり

2020 3/25

◎インタビュー

自由民主党
税制調査会長

甘利 明

日本総合研究所会長

寺島 実郎

日本空港ビルデング会長
鷹城 勲

『想定外』が頻発する今、商社の役割は？
三菱商事社長・垣内威彦の
大事なのは経営者の覚悟

本誌主幹
村田 博文



表紙の人
三菱商事社長
垣内 威彦
撮影 齊田 勲



いけだ・よしお

大阪医科大学卒業。1996年大阪医科大学附属病院形成外科入局。同大学附属病院形成外科病棟医長、東海大学病院形成外科・美容外科臨床助手を経て、2000年大阪いけだクリニック開院。04年銀座いけだクリニック開院。現在は東京皮膚科・形成外科総院長の他、東海大学病院形成外科非常勤講師、一般社団法人・JAAS日本アンチエイジング外科学会理事長をつとめる

医として、主にがん治療に携わって来ました。ただ、池田先生からご紹介がありましたように、研究分野での専門は細胞生物学・免疫学だったんです。

医師を志したきっかけと言われると大した話でもないんですが、わたしはもともとパイロット志望だったんです(笑)。
池田 そうだったんですか。
宇野 ええ。ですが、ずっと痩せ型体型だったこともあって、体力的にも厳しいだろうということでも早々と諦めてしまったんですね。それで試験を受けることなく方針転換を考えたまして、高校3年生の時に急遽、医学部を志望することにしたのです。

それから外科が専門で、研究分野としては免疫学に注力しました。東海大学では11年間、医学部3年生の基礎系の生体構造機能学の講師も兼任し、細胞生物学や免疫研究もやってきましたということですが。
池田 独立のきっかけは何だったのですか。
宇野 35歳の時に当時所属していた医局に頼まれ、ある病院の経営に携われることになったんです。そこで雇われ理事長として病院再建をしていましたが、平成24年(2012年)に独立しました。
ですが、来年で還暦になりますので、もうメスを握ることもほとんどありません。外科として携わると1回8時間を超えるような手術も週に最低1回はありましたから、体力的にも集中力的にも続かないだろう。あとは後進の若い先生方に譲るべきだと。
今はもう、ゆつくり時間をかけて患者さんと向き合いたいので全て予約制にして、午前・午後合わせて8人程度しか診ていません。その分を免疫とミトコンドリア研究に充てています。がん治療や若返りのような分野に活かさないか考えているところです。

池田 それでは、宇野先生がミトコンドリアやネオエイジングに注目するようになった経緯を、読者の皆さんに分かりやすく説明してもらえますか。
宇野 そもそも、がんも老化も、全て慢性的な炎症の原因となった病気なんです。そうした炎症に、ヒトが30歳を過ぎると急速に減少し始める成長ホルモン分泌の問題が大きく関わっていた。これが老化の源流だと考えられます。わたしがやろうとしていることは、いかにこうした状況を改善するかです。
少々専門的な話になりますが、ヒトの細胞にはミトコンドリアという小さなパーツが何百個も備わっています。そして細胞が活動するためのエネルギー、ATP(アデノシン三リン酸)という物質を、ミトコンドリアが生み出しているのです。
そしてもう一つはミトコンドリアが、自身の入っている細胞を常に内部から見張っていて、細胞が老化して機能障害が現れたり、或いはがん化したりした時に、自爆させる装置の役目も担っていたのです。

「人生100年時代。新たな若返り医療、ネオエイジングを普及したい！」

東京皮膚科・形成外科総院長

東京MITクリニック理事長

池田 欣生 × 宇野 克明

若化(じゃつか)医療(ネオエイジング)という新しい医療が注目されている。老化細胞をリセットし、新たな細胞の再生を図ろうとするもので、従来のアンチエイジング(抗老化)医療とはまったくアプローチの手法が違うものだ。今回はネオエイジング研究を進める東京MITクリニック理事長の宇野氏が登場。ネオエイジングの未来とは――。



うの・かつあき

1986年東海大学医学部卒業。医学博士。同年東京女子医科大学第二外科、88年杏林大学医学部第一外科、96年医療法人財団コンフォート理事長(兼任)。2001年東海大学医学部外科、04年哈爾濱医科大学(中国)名誉教授、東海大学医学部生体構造機能学・非常勤講師(兼任)。12年がん医療専門の東京MITクリニックを開設、14年医療法人社団東京MITクリニック理事長・院長に就任。

臨床の専門は外科 研究の専門は免疫

池田 今回は若返りを医学する「ネオエイジング」という全く新しい概念の研究を続ける宇野先生にご登場いただきました。宇野先生はこれまでがん治療をメインとしながら、免疫学を専門に研究されてきました。本題に入る前に、まずは医師を志したきっかけやこれまでの歩みなど、自己紹介からお願いできますか。
宇野 もともと臨床の専門は外科

ネオエイジングとアンチエイジングの違い

池田 それでは、宇野先生がミトコンドリアやネオエイジングに注目するようになった経緯を、読者の皆さんに分かりやすく説明してもらえますか。

宇野 そもそも、がんも老化も、全て慢性的な炎症の原因となった病気なんです。そうした炎症に、ヒトが30歳を過ぎると急速に減少し始める成長ホルモン分泌の問題が大きく関わっていた。これが老化の源流だと考えられます。わたしがやろうとしていることは、いかにこうした状況を改善するかです。

少々専門的な話になりますが、ヒトの細胞にはミトコンドリアという小さなパーツが何百個も備わっています。そして細胞が活動するためのエネルギー、ATP(アデノシン三リン酸)という物質を、ミトコンドリアが生み出しているのです。

そしてもう一つはミトコンドリアが、自身の入っている細胞を常に内部から見張っていて、細胞が老化して機能障害が現れたり、或いはがん化したりした時に、自爆させる装置の役目も担っていたのです。



日本初上陸の「若化専用」医薬「Cellactin (セルアクチン)」と共に

一方で人間の本質は何かと言ったら中身が大事ですから、中身を健康にすることができないだろとか。その意味で、宇野先生と一緒に新しいことを生み出していくことができればいいなと思っています。

宇野 近年、再生医療がとて盛んになり始め、若返りや健康長寿にも関心が高まり始めています。こうした時期に、池田先生のような若返りを専門に研究なさっている先生と出会えたことは、まさしく何かの縁だと思えます。現役を退く時期も控え、わたし自身はこれ以上、患者さんを増やせませんから、今後は自分が前面に立

つということはなくて、ぜひ、池田先生のような若い世代の医師に、これからの若化医療をリードしていただきたいと思います。

池田 これからは人生100年時代と言われるようになったのに、歳をとったんだから仕方ないといっ、何事も諦めて余生を過ごすのはもったいないと思うんです。

今は高齢化がどんどん進み、公的医療保険の財政にも限界が訪れています。そういう中で、若返りや長寿対策が注目されるようになったというのには当然のことだと思いますし、身体を若返らせることで健康寿命を延ばすことができれば、どんなに歳をとっても、より幸せな人生を送ることができるとは思いません。

宇野 気づけば、わたしも歳をとってしまいました(笑)。これまでの人生でネオエイジングという概念にたどり着き、池田先生にもお会いすることができたこと。加えて今回、未参加ですが、当時医学生として知り合った現・協同研究医の藤林万里子氏も心強いパートナーです。

今後は、池田先生、藤林先生ともに所属するJ A A S日本アンチエイジング外科学会の一員として、何かサポート役を頂戴できれば幸いです。

東京MITクリニック

〒104-0028 東京都中央区八重洲2-5-6 KBYビル3F

TEL 03-3231-8724

「ネオエイジング治療」について HP <http://www.neoaging.jp/>

東京皮膚科・形成外科銀座院

〒104-0061 東京都中央区銀座2-11-8 ラウンドクロス銀座3F

TEL 03-3545-8000

HP <http://www.251901.net/>

古い細胞が体の中に増えて老化を促進したり、がん細胞が発生したりして生命に危険を及ぼす前に、ミトコンドリアの自爆作用によって、それらを効果的に排除してしまうわけです。

しかし、歳をとるということは、細胞と共に、その中のミトコンドリア機能も劣化してしまうということなんです。免疫という力を発揮して身を守るリンパ球も細胞の一つで、その中のミトコンドリアも同様に劣化する。すると当然、異物を排除する上で欠かせない免疫力も低下してしまい、その結果、老化細胞も発生したが細胞も、排除できなくなってしまうんです。

実は、これらミトコンドリア機能の低下や免疫の低下は、歳をとって体をむしばんでくる慢性的な炎症によるものでした。しかも、こうした炎症を生じる原因に、体内で分泌される成長ホルモンの減少が大きく関わっていたのです。そこで再び成長ホルモンの分泌を改善し、老化を防ごうというのが「ネオエイジング」という新しい概念です。

池田 要は、今まで歳を取ったら、一方通行で若返ると言うことは無いと言われていたんです。普通は70歳

だったら70歳の細胞、60歳だったら60歳の細胞を生み出すんですが、先生の研究は60歳でも50歳の細胞を生み出せるという研究なんです。だから、ネオなんです。

老化の反対が若化

宇野 老化の反対が「若化(じやつか)」だと、ぜひ覚えていただきたいのですが、今までは老化に対抗するという概念、抗老化(アンチエイジング)の考え方が主流だったわけですね。

「ネオエイジング」は、これからのエイジングケアには欠かせない、全く新たな若返り対策です。従来のアンチエイジングは、すでに老化してしまった細胞を補修するという概念です。当然、補修しただけでは老化の根本解決には至りません。そこで、老化細胞を再び新たな細胞に置き換えようというのが、「若化」の概念なんです。

池田先生は形成外科が専門なので、外科的な処置によってエイジングケアを行うわけですね。でも、素晴らしい技術によって外観を美しく整えたとしても、手術の後に再びよやたるみが出てきてしまうと、せっかく

くの技術も報われません。ですが、手術によって素晴らしい成果が得られた後で、内面からも若返り効果を維持することができれば、池田先生も頑張って手術をした甲斐もあるだろうと。そう思って先生と合流したわけなんです。

池田 わたしはずっとアンチエイジングの研究をしていますが、近年は予防医学の中でがん領域にスポットが当たるようになっていて、若化医療にも注目が集まるようになりました。

宇野 わたしの場合、がん治療に免疫という仕組みを導入している中で、ふと周りを見渡すと、その根本となるミトコンドリアを研究する医者がほとんどいないことに気がついたんです。だから、これは面白いのではないかと考え、自分のキャリアでもあった細胞生物学の知識を総動員。ミトコンドリアをとっかかりにして、ともに老化性の疾患である「がん」と「若返り」の双方に生かそうと考えたのです。

そうした成果が、リスクチェック1 (Risk Check) という血液検査の開発につながったのです。がんの再発や転移につながる兆候や、見た目の老化につながる炎症のマーカ

Iをまとめて測定できる検査です。そしてもう一つの成果が、がん患者さんで余命が半年、と宣告されたような方への延命対処です。がんは、究極の細胞老化によって生じた炎症によって、どんな体力を失ってしまっています。そうした細胞を元気にしてあげて余命を1年、あるいは2年延ばすといったことも充分可能になると考えます。

実は、こうしたネオエイジングの概念に対し、すでに米国からは『Cellactin (セルアクチン)』という医薬品の輸入も始まっています。もちろん、医師による事前登録と輸入手続きは必要ですが、日本でも処方できるようなっていったのです。

こうした若化用医薬品の服用によって、「肌が若返った」、「膝の痛みが消えた」など、実感された多数の効果も多くの方々から頂戴しています。

今後は裏方として 基礎医学のサポーターに

池田 わたしはずっと見た目の方の治療をやってきたので、ある意味で、しわが無くなったとか、患者さんに分かりやすい医療を提供してきました。だから、見た目を変えることも大事なことだと思っていますが、